



TITLE:

史的唯物論略解(二)Borchardt, Der
historische Materialismus

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. 史的唯物論略解(二)Borchardt, Der historische Materialismus.
經濟論叢 1921, 12(6): 953-958

ISSUE DATE:

1921-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127786>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第二十卷 第六號

大正十一年六月一日發行

論叢

中世都市の發達

文學博士 三浦 周行

社會的法的經濟學の考察

文學博士 米田庄太郎

純理上より見たる財産重課の理由

法學博士 神戸 正雄

戰後獨逸の社會主義運動

法學博士 河田 嗣郎

時論

増俸の研究

法學博士 小川郷太郎

說苑

我國農產物生産調査に就いて

法學博士 高岡 熊雄

舊岩國藩の製紙原料保護政策

經濟學士 吉川 元光

所得と勞賃

經濟學士 堀 經夫

雜錄

史的唯物論略解

法學博士 河上 肇

Zimmermann の政治測量

法學博士 財部 靜治

勞働組合主義變轉の傾向

法學博士 河田 嗣郎

附 錄

本誌第十二卷總目錄

雜 錄

史的唯物論略解 (二)

河 上 肇

Borchardt, Der historische Materialismus

の主要なる部分の意譯

第二、史的唯物論の説明せんとする所は社會的變革にある

社會的變革の意義

以上述べたる如く、史的唯物論は、歴史上の事件をば人間の利己的衝動によつて説明せんとするものでも無く、又之をば當時の經濟狀態から説明せんとするものでも無い。それなら、それは、何を何によつて説明せんとする者であるか？

史的唯物論が歴史を説明せんとする者だと云ふことは、言ふまでも無い。しかし其の説明せんとする所の歴史とは、果して如何なるものであるか？ その點について、世間には、廣く誤

解が流布してゐるやうである。

吾々は小供の時から、歴史といへば、戦争や、立法や、發明や、發見や、其の他の事柄に關する種々の出來事を指すものに外ならざるが如くに教へられてゐる。勿論何人といへども、此等の出來事が歴史に屬することを、否認する者はない。けれども此等の出來事は、果して歴史の全内容を組み立てゝゐるのだらうか？ 其の外に歴史に屬すべきものは何も無いのであらうか？——私は説明の便宜のために、再び一定の事例を引くであらう。

一七九八年に始まつた佛蘭西の大革命は、歴史上甚だ重大な地位を占めてゐるものであるが、その佛蘭西革命と謂ふのは全體何であるかと云へば、それは勿論、バスチュ牢獄の襲撃から、王の廢位及び斬殺を経て、ナポレオンの皇帝即位に亘るまでの、種々なる出來事の系列を指す。しかし、吾々が一纏めにして佛蘭西革命と謂つてゐる、この歴史上の出來事を、理解しやうと思ふ場合には、誰でもが其の原因を尋

ねることになる。さて之が原因を尋ねるとなる
と、吾々は、佛蘭西が先づ王國から共和國に變
り、更に共和國から帝國に變つたといふ、あの
激甚な國家變革は、國政の紊亂から直接に生じ
たものだ、といふ事を發見する。一七七四年に
王位に登つたルイ十六世の治下に於ては、有力
な人が引續き財政の局に當つたけれども、當時
の政府にとつては、必要なだけの資金を調達す
ることが、不可能であつたのである。然らば國
政全體の停滯無秩序を齎すに至つた所の、此の
如き資金の不足、財政の紊亂は、何に原因して
ゐるか云へば、その一部分は、ルイ十五世
(一七二五年より一七七四年に至る)の治下に行
はれた、かの恐るべき濫費に本づくのである。
キルヘルム、ブローヌが彼れの佛蘭西革命史に
記述する所によれば、『ルイ十五世の治下に於
て、宮廷の紊亂は其の極に達し、寵嬖のため國
費は無茶苦茶に濫用せられた。……二人のル
イ(ルイ十四世及び十五世を指す)の治下に於て
權勢を弄せし寵嬖達が、佛蘭西國にかけた費用

の總額を計算したならば、それは驚くべき巨額
に達するであらう。之に加ふるに、不仕合な
戦争が引續き行はれ、國民の負擔は高まり、多
數の者は益々困窮に陥つた。さればルイ十五世
が崩じた時には、國民は怨嗟と呪詛を以て、彼
れの死骸を葬つた。』——革命爆發前の事情は此
の如くであつた。しかし此等の事柄は、革命の
爆發を只一部分説明するに足るだけであり、殊
に其の經過の説明としては更に不十分なものだ
ある。もし革命の原因が此の如きものに止まる
ならば、當時の革命を防止するためには、ルイ
十六世が希望し且つ計畫したやうに、政費を節
約し行政を整理するといふことで、十分であつ
た筈である。しかるに、實際さう行かなかつた
のは、何故であるか? どうして革命が爆發し
て、佛蘭西國の政體をば全く違つた基礎の上
に据え付けることに爲つたのは、何故であるか?
それは、佛蘭西國民の社會的狀態が已に變動し
てゐたからである。種々なる階級の間に於ける
關係が變つて仕舞つて、最早や舊來の國家制度

と相容れなく爲つてゐたのである。だから總ての階級の上に當時は一の壓力が加はつてゐて、その壓力は、一七七四年に行はれたやうな單なる財政整理だけでは、到底片付く氣遣はなく、従て一旦民衆が動き出した後は、次ぎから次ぎへと、何處までも之を押し進めた譯である。ブローヌの佛蘭西革命史にいふ、『最初宮廷と争ひを始めたのは特權階級であつて、大變動の端緒は其れによつて開かれたのであるが、しかし反抗を企てた階級の下には、次ぎ／＼に新らしい階級が出て來て、なほも先きに進まうとしたので、變動は容易に停止しなかつたのである。特權階級と宮廷との鬭争は、第三階級全體の動員を促し、その爲めに間もなく特權階級は、今まで争つてゐた宮廷と聯合した。そうして大きな資産家階級は、新たなる力として戰場に現はれ、門閥の特權を廢止し、一七九一年の憲法を作り、之によつて新たなる有産者的社會を建設せんと企てた。しかるに有産者階級の中級及び下級に屬する者並びに無産者等は、彼等の利益が此の

憲法によつて保障されてゐないと云ふことを見て、一のデモクラシーを實現せんことを要望した。そこで間もなく復た争鬭が起り、その結果、一七九一年の憲法の支持者並びに大資本家階級の代表者は、宮廷の味方についた。ところが民主的の有産者階級は、其の下にゐる無産者階級と一味になり、最も有力な且つ最も多數な階級として、遂に勝利を占め、王朝を轉覆して仕舞つた。……』

佛蘭西革命の爆發及び經過をば、只大多數の民衆の經濟狀態が甚しく抑壓されてゐたと云ふ事實のみより、説明せんとすることの、如何に誤謬であるかは、以上の記述により明瞭である。王の誅求に對し抗爭し、之によつて革命の端を開くに至つた所のものは、全然貧乏人ではなくて、貴族及び僧侶より成る特權階級であつた。しかるに遂にあれほどの大騷ぎを惹き起すことに爲つたのは、従前不利益な地位に置かれてゐた階級が、佛蘭西の全政治狀態を變更して、之を其の社會狀態と一致せしめなければ爲らぬ、

といふ事情が在つたからである。だから佛蘭西革命の最後の且つ本來の原因は、之に先行せし社會狀態の變動、即ち社會的變革にある、と謂はなければならぬ。

しからは謂ふ所の『社會的變革』とは何を意味するか？

各國民は各時代に於て一定の『社會秩序』の中に生活するものである、即ち個々の個人は何等かの方法に於て一定の階級に纏められてゐるものである。或は社會の成員總てが相互に平等であり、平等の權利を有し、平等の生活狀態を維持し、所謂平等の『社會的地位』を保つてゐる場合もあれば、或は一國民の内部に金持と貧乏人、貴族と賤民といふやうな、種々の階級が在ることもある。或は一國民の内に只二個の階級が在るに止まる場合もあれば、或は三個又は其れ以上の階級が存在する場合もあり、又此等階級の相互の間に於ける社會的地位は、比較的平等に近づいてゐるものもあれば、甚しい懸隔を存す

るものもあつて、それは様々であるが、今、或る國民が一定の時代に其の下に生活する所の、一定の階級秩序は、その國民の所謂『社會狀態』なるものである。さうして此の社會狀態が變動する時、例へば新たな階級が成立して、これまでに在つた階級の間に這入り込むとか、或は從來已に存在してゐた諸階級相互の間に於ける關係が變動したとか、一の階級は新たな權利、新たな權力を得たのに、他の階級はこれまで有つてゐた權利を制限され、或は全く之を失つて仕舞つたとか、といふやうな場合には、吾々は其れを名けて一の社會的變革と謂ふのである。

佛蘭西革命に關する吾々の觀察は、斯かる社會的變革の重要さを立證する。既に吾々の觀察したるが如く、此の社會的變革よりして、吾々が佛蘭西革命と名くる所の、重大なる出來事の系列が發生したのである。此の如く、社會的變革なるものは、國民の生活に重大な關係を有するもので、寧ろ最古代より現代に至るまでの諸國民の生活は皆、この一回限りの、曾て停止す

る所なく、益々進み行く所の、社會的變革の裡に經過してゐると言ふべきである。人類の歴史は、その如何なる點を瞥見しても、吾々は到る處に、曾て停止することなき『社會的發展』を見る。如何なる國民も例外なしに、絶間なく一の時代から他の時代に亘つて、その全社會狀態を變化する。

此の社會的變革なるものが、有産者の學問によつて兎も角も顧みられることに爲つたのは、僅々數十年來のことである。蓋し精神的史觀の根據に立つて、有力者の性格及び意志の内に、歴史の原動力を見出さんとしてゐる人々にとつては、其の興味は總て或る人格者に集中されて仕舞つて、社會狀態は其の人々にとつて何うでも可いことか、少くとも極めて附隨的の事柄たるに過ぎなかつたからである。然るに吾々の見解に従へば、社會狀態及び其の變革が、歴史の進行にとつて最も重大なものである。元來歴史とさへ言へば、何時でも何等かの出來事を指すものゝやうに、吾々は教へられて來てゐるけれ

ども、しかし歴史の内容をば、只單に種々なる出來事のみより成ると考へるのは、根本的に誤謬である。勿論種々の出來事も歴史に屬する事柄には相違ないが、それはさまで重きをなす者ではない。それに比較すれば、社會的變革の方が一層重要だ、と謂はなければならぬ。何故かと言ふに、第一に、それは種々の出來事を、並びに其等の出來事の現はるゝ舞臺である所の社會的地盤を、動かす原動力であり、第二には、その直接の影響に於て、種々の出來事よりも、遙に廣く且つ深く達するものだからである。

さて史觀の本質がもし世界史の進行に對する説明を與ふるにありとするならば、以上の説明により、その職分とする所は、おのづから明かだ、と謂はなければならぬ。元來種々の出來事は、社會的變革により説明さるべきものである。かく言へばさて、例へばグスターフ・アドルフが一六三二年に死んだのは、社會的變革のためである、などと言ふのでは勿論ない。しかし、グスターフ・アドルフが死んだのは、彼に彈丸

が當つた爲めであり、彈丸が彼に當つたのは、戦争があつたからであり、戦争が起つたのは、當時に於ける階級の推移即ち社會的變革から發生した所の、利害の衝突のためである。如何なる出來事でも、それ／＼の出來事が成立するためには、社會的變革の外に、なほ特別な事情の一系列を必要とするは、勿論のことである。例へば、假ひ社會的變革があり、又假に戦争が起つたにしろ、當日グスターフ・アドルフが戰場に出なかつたか、又は偶然彼に對して彈丸が落ちて來なかつたかするならば、彼は當日死せざりし筈である。だから吾々が、種々の出來事は社會的變革により説明せらるゝ、と主張するのは、既に述べたやうに、社會的變革は種々の出來事が其の上に行はるゝ所の地盤を供する、といふだけの意味に過ぎない。個々の出來事が如何にして起るか云ふことは、それによつて説明さるゝ譯でなく、それは全體説明され得ぬことである。しかし——此點が肝要な點であるが——それは元來説明さるゝ必要のないことで

ある。個々の出來事が何故そんな風に發生し、それより外の經過を採らなかつたか、と云ふやうなことを研究するのは、全く意味のないことであり、意義のないことである。そんなことは世界史に於ける重要問題ではない。それ故史觀は、個々の出來事を説明することを一般に職分としてゐない、寧ろ吾々に向つて社會的變革の理解に必要な鎖鑰を提供すると云ふのが、その本來の任務である。

だから、唯物史觀の助けを藉りて、歴史上の出來事を斯く／＼なりと説明しやうと思ふのは、一の無益なる努力である。それは元來史的唯物論の職分とする所ではないのだから、それが出來ないからとて、何も驚くことは無い。史的唯物論は、そんな事を説明しやうとは、全く思つてゐないのである。その説明しやうと思つてゐるのは、社會的變革である。然らば、それは如何にして、この社會的變革の原因を説明せんとしてゐるのであるか、吾々は更に章を改めて其の大體を説くであらう。